



〔監修〕

小松左京／紀田順一郎

野

江苏工业学院图书馆

藏書章

全集

放送



三一書房

海野十三全集

第1巻 遺言状放送 (第10回配本)

1990年10月15日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京
	紀田順一
発行者	畠山滋
印刷所	日本写真印刷(株)
製本所	東京美術紙工
発行所	株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03(812) 3131~5 番
振替 東京 9-84160 番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN 4-380-90540-3

© 1990年

遺言状放送・目次

遺言状放送 7

三角形の恐怖 17

電気風呂の怪死事件 31

壊れたバリコン 51

空中墳墓 63

白蛇の死 79

赤耀館事件の真相 93

電気看板の神経 125

階段 141

人造人間殺害事件 159

国際殺人団の崩壊 169

麻雀殺人事件 マーじゃん 187

省線電車の射撃手 しょうせんでんしゃ しやげきしゅ 205

ネオン横丁殺人事件 よこちよう 231

振動魔 しんどう ま 247

恐しき通夜 おそろ つや 267

西湖の屍人 せいこ しじん 285

遊星植民説 ゆうせいしよくみんせつ 307

殺人の涯 はて 313

空襲葬送曲 くうしゆうそうそうきよく 317

解題「長山靖生」 423

遺言状放送——海野十三全集・第1卷——

遺言状放送

ゆいごんじょうほうそう

「我等の棲^すんでいる球形の世界が破壊するのは何時^{いつ}のことなのであろうか？」

天文学者の説くところによれば、それは我等の世界が他の遊星と衝突し、われもかれもが煙の如くに飛散して消滅するときにこの球形体の最後であろうが、それはおそらく今から数百億年後のことであろうと言う。

しかしそれは真^ま赤^{あか}な嘘^{うそ}だ。

我等の棲める世界が破壊されるべき時は正に只今から十分間後に迫っているのだ！ 驚いてはいけない……」

ここまで聴くと天野祐吉は思わず身体を受信機の方へのめらせて両手で両耳^{ふたみみ}受話器^{じやうわき}を押えたものである。嘘にも冗談にもせよそれは余りに奇怪なことである。

奇怪と言えば天野祐吉がこうして地球以外の他の遊星に棲息している生物の喋^{はな}っている言葉を聴いていることからして甚だ奇怪であつて、發明者たる祐吉自身にさえ今でもちよいちよいは彼の苦心の末になつた超^{ちやう}短^{たん}波^は長^{はう}廻^{くわい}折^{せつ}式^{しき}變調^{へんてう}受信機^{じしんき}の驚くべき能力が或いは夢の中の話ではなかつたかという懷疑に陥^{おち}入^いることもあつたのである。

しかし發明の端緒^{たんしよ}というものはこの超^{ちやう}短^{たん}波^は長^{はう}廻^{くわい}折^{せつ}式^{しき}變調^{へんてう}受信機^{じしんき}に限らず大抵極く些細な偶然^{ぐうぜん}の機会^{きかい}から見付かるものなので、發明が出来上つてしまえば後になつては如何なる大發明と雖^{いふ}も一向驚倒するほどの価値はな

く、寧^じろ何故^{なにゆゑ}に斯^{かく}くも長い間こんな平凡な事が人間に解^とつていになつたかという事を怪しむ氣持が誰にも湧いて来るものである。

天野祐吉の發明の場合は一層偶然^{ぐうぜん}の機会^{きかい}からなのであつて、彼が早昼の食事をするために銀座の丸花家という大阪寿司屋に飛び込んで烏貝の押し寿司を頬張りながら、ちよいと店の硝子棚に並んだ蒲鉾^{かまぼこ}の一行を見たときに恰^{あた}かも稲妻が鏡に當つて反射するように、この發明のアイデアが浮び上つたのだ。それと同時に彼は跳ね飛ばされるように椅子から突立ち硝子棚の蒲鉾の方へいきなり両手をさしのべ、

「そいつだ。そいつだ」

と口走つて給仕女を驚かしたのであつた。

次の瞬間に彼は大決心をして表を走る自動車呼び止めて「新宿へ飛ばせ」と命じたのである。自動車は唸^{うな}るように疾走する。幌を手早く下ろすと彼は車内を見廻しながら十分間に構想をまとめ上げその可能性^{ごうせいせい}を信じ得たのであつた。

結局彼は「十六メートルの超^{ちやう}短^{たん}波^は長^{はう}電波は地球の外を包むヘビサイド氏電導層を最もよく透過する」ということと「振動波の波形は生物の感情を現わす」という二つの原理を樹^{たて}て廻折式變調受信機を組立て上げたのであつた。最初は思った通りにいかなかったので色々と部分

部分を幾度も作り換えて遂に最初の機械の百五十倍に達する感度を備えた装置を作り上げ、これで数万光年に相当する遠距離にある遊星からの無線電話も容易く捉えた上、これをエスベラント語に変調して聴かれるように考察したのであった。

祐吉の最新の受信機が例の屋根裏の部屋に設置せられた時、彼を襲つて来る緊張は、この地球に住んでいる誰よりも先に、地球以外の棲息せる生物の言葉を聞くという事であつた。そこにはどんなに珍らしい世界が開け、又どんなに不思議な思想が表現されていることだろうか。彼は闇中に宝庫の内をさぐつて見るような一種奇妙な興奮に捉われた。それはもう確実に現実なる存在の前に一枚の薄い紙の幕を距てて相對しているような気持ちであつた。それほど祐吉は彼の受信機的能力については強い自信を持っていた。この上は一步進んで確実なる存在の奇怪さに触れることばかりが取残されてあるのだと彼は思った。奇怪な実在を攫んで気が変になることの無いように、彼は予めあらゆる想像を逞しゆうして今触れんとする世界からの刺激に備えたのであつた。

ところが折角の覚悟も何の役にも立たない程、事実彼はひどく興奮したというのは幸か不幸か、彼の聴いた地球以外から始めて到達した言葉の内容は、冒頭に述べたように余りに突飛すぎる事柄であつたからである。この

奇怪な警告の発信者の棲んでいる一遊星は、今やその寿命が十分間に切りつめられているのだという。十分間経てばその遊星は粉々に破壊されてしまおうと言うのだ。彼は驚いた。しかし次の瞬間には馬鹿馬鹿しくなつて危く吹き出そうとしたが、思い直して笑いを吞み込むと共に、不思議な遊星からの言葉に耳を傾けたのであつた。

その声は語り続ける。

「……今から十分間後に私の棲んでいる球形の世界が消滅してしまふなどと言うと如何にも私が少し気が変になつてでもいるように思われることだろうが、私は至極真面目でこの遺言状を放送しているのである。

遺言状の放送！ 私自身すらそれが如何にも突飛なことのように感じられるが、今のような私の境遇では遺言状を電波に変成して宏大なる空間のあらゆる方向へ発射することが最も有効な遺言の方法だと思ふ。遺言状を紙に書き岩に刻んだとて、その紙や岩を載せた球形の世界自身が今から十分間後には、粉々になつて飛んでしまふのだということに気がついたならば、如何にそれが無駄なことであるかに思い当らう。兎に角この上は、我等が棲める球形世界以外に遺言の保存か或いは伝達を計画しなければならぬ。われ等の智力では特に短い波長の電磁波のみがこの世界の地上から放射されてこの世界以外

の数しれぬ多くの遊星の方へ向け大宇宙の中を伝播して行くことを知っている許りである。

しかし私の遺言が他の遊星の生物によく聴きとって貰えるものかどうかについてはまだまだ多くの疑問が横たわっているのを感じるのである。たとえば、私に許された限りある通信電力が果して私の遺言をのせた電波をしてこの大宇宙を隈なく横断するだけの力があるであろうか。私は途中で通達力が損傷せらる程度の最も小さい筈の十六メートル短波長電波を選びはしたが、四千億光年の大宇宙を渡り得られるものとは考えられない。それから又たとい途中の遊星に私の遺言を載せた電波がぶつかったとしても果してその遊星に生物が棲んでいるだろうか。たとえ運よく生物が棲んでいたとてまるつきり我が球形世界と交渉のない遊星に生きている者が、私達の思想を判知して呉れるであろうか。これらのことを本當に考えつめて行くともう不安で一ぱいになり、遺言放送を執行する勇気がすっかり挫けてしまうのを覚ゆるのである。

それにも係らずこの頼り少い実験、それは全く無限の底ぬけ井戸の中に矢を放つような無駄な努力かもしれない通信を斯くの如く只今私がやっている訳は、何しろ私の寿命がはや十分間のあと（いやそれはもう十分間どころか、只今では九分しか残っていないのだ、噫）九分

の後に終ろうとしているし、それにとても耐え切れないことは私のすんでいる球形の世界が跡も残らぬように崩壊してしまつて、今日まで八十億年かかつて作り上げたあらゆる文化、絢爛を極めたその歴史が塵一本ものこさずして永久に失われてしまおうと言うのだ。これがどうして黙っていられようか。それを考えると私は激しい眩暈を感じる。いつもは物理学壇上にいささか誇りを持っていた頭脳も打ちしびれて仕舞いそうになる。いやもう九分の命だ。私はもう既に気が変になつてゐるのじゃないかとさえ思う。私は死を賭してこの呪われた遺言を放送しなければならぬ。

それにだ！

それに私を斯くの如く死の努力を続けさせる大きなわけがあるのである、それは私の棲んでいる球形の世界の数億人に昇る人類の中、この九分間後に迫れる世界の最後を信じてゐるのはたった私自身一個であることだ。

多くの人々——私一人をのぞいたあらゆる人達は目睫裡に迫れる彼等の運命の呪いを知らない。而も彼等が自らの無智によつてこれを感じることが出来ないのなら私は彼等に穏かな同情をそそぐことが出来るであろう。ところが私にはそんなスマートな同情を持つことすら最早出来ないのだ。

一言にしてこれを蔽えば、彼等の無自覚は不愉快極ま

る強制と、悲しむべき理性の失明に起因しているのである。もつとこれをあからさまに言うならば、先に述べたような私の世界崩壊説に反対意見を持っている学者達の無反省な卑怯な行動によつて、元来が無自覚な享樂児たる民衆が自己催眠術もが手伝つてすっかり欺瞞され終つたのである。そして彼等は大酒に酔いつぶれたように自制を失つて仕舞つて反対派の学者のふりかざす邪剣の本に集り、大河が氾濫して小さな藁家に襲いかかるが如く押寄せて来て、私の名誉を傷け、幸福を奪い、剩え彼等の利害には何の關係もない筈の私の片腕を折り、左眼をつぶして仕舞つたのである。あらゆる新聞紙には「人類の賊」とか「平和の攪乱者」とか書き立てた。中には「即刻、彼を絞首台に送れ!」という初号活字の号外をさえ発行したところもある。治安警察は私に精神病院の收容自動車を送り、私刑を行わんとて群衆を制するためにその沿道に二個師団の兵士と三千人の警官とを集中したのであつた。私が古馴染の女たちの慾心と弱き女性の同情とを覗うことを知らなかつたなら、穴倉ながら今のようにこうして自由に立ち振舞えるような境遇にはならなかつたことだろう。

何が彼等を苛立たせたか。勿論それは反対派の学者達の処方箋通りの筋書が効を奏したのに過ぎない。それにしても彼等の一斉に亡ぶべき時がもう十数日後に迫つて

いるぞという私の警告文が新聞紙上に兎も角も掲載せられたのを讀んだとき、彼等は無性に腹立しくもなつたのだろう。

しかし私は充分これを学理上からも説いたつもりだ。通俗記事にもして十三種の出版物にもした。大学の講堂で立会い演説にも出たのである。だが、そこには嘲笑と雑口の声のみ多くしてしんみりと理解をして呉れる者がなかつた。特に遺憾なのは先輩に当る斯界の大家連中の浅薄な臆断である。

その日のことは忘れもしない。

かねての自分からの申込によつて首都の××大学の物理學講堂で第一回の『世界崩壊接近論』の講演を行うこととなつた。講演に先立つてかなり猛烈な中止勧告を受けたが、私は期するところがあるが為めに断然とこれを斥けて出演した。その日の講演の主点は次のようであつた。

今日茲に浅學菲才をも顧みず學界のそれぞれの權威者大家の方々の前に立ちまして『世界崩壊接近論』と題しまして御静聴を願うに至りましたことは、わたくしの最も光榮とするところで御座います。

私は本論に入るに先立ちまして第一に「神を怖れよ」と言う事に就て一寸申述べたいと存じます。私共の棲ん

でいますところの球形世界では私共人類が最も高尚なる生物でありまして、私共がこの地上に始めて出現いたしましてからの約五万年を経過し、その智囊は慾望にあふれて極端にひきしばられ発明、発見は相次いで起ると共に、忽ち日常生活に取入れられて私共の慾望を満足せしめています。しかし慾望には際限がないが為に、それと同時に慾望がこの頃は余り容易に得られるようになって来たために必然的に次に起つて来る慾望には人類として大いに慎まねばならぬのまが平然と現れて参ります。それは一面致し方のない事のようにも考えられますが、又一面から考えるとそれは恐ろしい畏であるようにも思われます。一人人類は人類としての敬虔さを常に持つていることが必要であります。「神を怖れる」という事を忘れ、神を冒瀆するような事はあくまで慎まねばならぬと思います。然るに現代はこの立派な埒を乱暴にも蹴破つて神を怖れぬ仕儀や慾求が平然と行われるようになっていっていると思います。

今茲に一例を申し上げますならば、人類が五万年懸つて遂に得たる靈藥と称する第九十五番目の原子チロリウム^{チロリウム}の獲得に対する人類の熱心さとくらみは余りにひどくはないかと思ひます。チロリウムは人類に適度に服用せられて不老不死の大目的を達するという証明が出るや否や人々はあらゆる醜い争闘を演じてこの稀代の靈藥を手

に入れようと焦っています。ラジウムよりも一層その存在量の少いチロリウムが、結局人類の全てへの需要を充すためには到底あたり前な分配方法では数人の人類を満足させることも出来ません。そのために遂にここにチロリウムの人造があらゆる研究費を吝まず試みられました。

その結果最も興味あるチロリウム製造の可能は、酸素瓦斯^{ガス}を十八原子集めてチロリウム一原子に変成する割で、多量のチロリウムを造ろうと言う方法で、それは今日茲に御臨席の方々の内、数人の方によつて大体信じられてゐる次第です。

しかし是非この事を行う前に一度よく考えて見なければならぬことがあります。それは人間は誰も彼も不老不死で生きのびたいと言う慾望を起す事は果して許し得べき正しい事だろうかという事です、そして第二には酸素原子をチロリウム原子に変成する実験は果して安全に取搬^{くわん}び得るものであるかと言う二つの疑問なのであります、私は何れのことも、みんな私達にとつて頗る有害であることを力説したいと思ひます。

第一全ての人間が不老不死を希い他人を押のけてもチロリウムを入手してこれを服用しようという事は神によつて造られた人間の犯すべからざる権限であり、更に骨肉相咬む類の醜態を誘発して人類の風紀は下等動物以下

に墮落するのは火を見るより明かな事で、人類の自制によつて極力避けなければならぬことです。

第二は酸素瓦斯をチロリウムに変成する実験は最も怖るべき惨禍發生を充分孕んでいるものと私は断言いたします。これに対する私の觀察は私の専門たる物理学上の新学説として特に御聴取願ひたき論点であります。

私は長い間物質構造学研究の結果、水素原子とヘリウム原子との間に横わる不思議な事実について一つの説を立てました。御存知の通り水素原子は現在の物質中最も構造の簡単なものでありまして、核に當る一個の陽電氣とこれをめぐつて廻轉している一個の陰電氣とから組織せられています。そしてその原子量と唱うる重量は一・〇〇八に當っています。

又ヘリウム原子というのは、あらゆる物質中で水素原子に次いで簡単な構造をしているものでありまして、中心の核は四個の陽電氣と二個の陰電氣とが固つたもので、その核の周りを二個の陰電氣が廻轉してしまつてその状態は恰も太陽の周囲を多くの惑星が取巻いて廻轉しているのと同じ事です。ヘリウム原子の重さは四に相当しますが、ここに不思議な事実があるのです。

水素原子が陽陰一對の電氣で出来ているし、ヘリウム原子は数え上げると恰度陽陰電氣四対から出来上つていますから、ヘリウムは水素原子の四倍の重さがなければ

ばならないわけです。

ところが水素原子の重さである一・〇〇八を四倍しますと四・〇三二となつてヘリウム原子の本当の重さ四よりは〇・〇三二だけ重いことになります。これは一体どうした訳で等しくならないのかと言う事を考えて見ました結果、水素原子のように陽陰電氣が単独に動いている場合とは違つてヘリウムの核のように、核の中に四個の陽電氣と二個の陰電氣とが一緒に固らなければならなかつたときには、その重さが減るという事が判つたのです。つまり四個の水素原子が一個のヘリウム原子になると〇・〇三二だけ軽くなるのです。

〇・〇三二だけ軽くなつてその重さに相当するものとはどんな形に消滅してしまうのかという事を考えてみました。これは実に勢力に交換せられることが判りました。これは相対性原理から説明のつくことです。すべて物の重さというものは、電力や機械力と同じように、或る量の仕事をすることが出来る力、即ちこのところで言う勢力に変成せられるものであるという事が判りました。

これを計算して見ますと、一グラムの水素原子が全部ヘリウム原子になつたとすると十三万四千馬力で一時間ひっぱるほどの速い素晴らしく大きな電力になります。たつた一グラムの水素をヘリウムに変成したばかりで特

急列車が七十組同時に動くのですから大変な力が出るわけになります。

この怖るべき事実から出発して、今度行われようとする実験——酸素をチロリウムに変成するというと、たった一グラムの酸素を蚤の陰囊ほどのチロリウムに直すために発生する力は、水素をヘリウムに直した場合の約十万倍であつて、馬力になると百三十億馬力となつて私等では到底想像することの出来ない悪魔のような巨大な力です。ことに近く、茲に御臨席の方々によつて行われる実験には七千グラムの酸素をお使いになるそうですから、その実験が成功したときに出で来る勢力は、胸に考えてみただけで脳貧血になりそうな莫大なものです。

私はその巨大な勢力エネルギが飛び出して来たときの事を考えると慄然おそおそといたします。多分その驚くべき巨大な力は簡単に人類に操縦されはしないでしょう。

私は想像します。おおそれは最も恐ろしき出来事の端緒ちよとなることでしょう。かくも短い時間の中に、かくも小さい空間に発生せられた巨大なる勢力エネルギは人力を超越し、人意を踏み蹂躪ふみしりつて、そこに現われ来るものは第二次の原子変成現象、第三次の原子変成現象、それからまた第四次、第五次と引続いて起り、止め度もなく膨脹拡大する原子アトミック変成が数万の雷鳴と地震と旋風が一瞬間にこの世界に訪れたように暴威をうちふるい、衝突と灼

熱と崩壊と蒸発と飛散とが一時に生じて瞬またたくうちにこのなつかしき我等を載せている球形の世界を破壊消滅し去つてしまうことであらうと信じます。

* * *

私の講演がこの所までに進んで来たとき会場の前列に座っていたチロリウム製造実験を専攻する教授連は一せいに満面を朱の如くにして両腕を頭よりも高く打ちふるわせながら立ち上つた。それからあのちの会場の混乱は説明する必要がある。教授の一人が「ニュートンの法則を忘れた君は物理学界から直ちに破門すべきだ」とか「千古不易の勢力不減律はどうしてくれるんだ」とかの私の耳の近くで怒鳴っているのが、のほせ上つた私の鼓膜に脆かわろけ気ながら通じたのを記憶している。次の瞬間に私は襲いかかる群衆の潮の前に氣を失つてしまった。私が腕一本と左眼を失つたのはこの時のことなのである。

おおもはや三十秒だッ！

正に三十秒、二十八秒、二十六秒！

裁きの時は近づいた。俺の言つた事が当るか、世界の馬鹿共が言つた事が当るか。

ああ俺は氣を失いそうだ。あの大学の馬鹿教授連が神を恐れぬ実験のスウィッチを入れる瞬間までは俺に知覺を与えて呉れ！ もう十秒だ。俺は負けないぞ、負けないッ！